

式年大祭記念号

戸隠神社



青垣

平成27年[春夏号]

戸隠神社発行

〒381-4101

長野県長野市戸隠3506

026-254-2001

別稿
特寄

九頭龍辯財天の修復

大佛師

松本明慶

大切にお厨子に納められた、戸隠の九頭龍辯財天の、創建より四百年ぶりの修復に当たらせて頂いたのは、平成十一年の事でした。この辯財天曼荼羅は、江戸時代初期の作品、全二十神の群像で、百三十年代お厨子の扉を閉ざし、静かに時の経過を耐える運命を辿りました。

辯財天を上檀中央に祀り、その左右にはやや小ぶりの大黒天と毘沙門天、そして眷属の十五童子と男女神等を揃えた立体曼荼羅の修復は、京都西山連峰の麓、大原



九頭龍辯財天 久山勝彦氏蔵

野に佛所を構える私の工房において、今日までに十作ほど依頼を受けました。江戸時代は残念ながら優れた職人が少なく、体数が増える仕事は雑になりがちなのですが、中でもこの作品はお顔も柔らかな品格が漂い、丁寧に制作された秀作でしたので、出来る限り創建当時に近い状態を目指した、やりがいのある仕事でした。

また、永らく密封されていた事で、欠損による修理・補強箇所は少なく済んだのですが、空気の流通が無く湿度が籠りまして、彩色の剥落が酷く、彩色は下地からすべてやり直して、薄古色仕上げの修復を施しました。

戸隠信仰の起源は、あらゆる生命にとって欠く事の出来ない水を司る龍神に由来しているとの事ですが、辯財天はまさに水の女神なのです。

元来、古代インドのブラフマーヴァルタ地域を流れる河をサラ

スパティーと呼び、神格化されたと伝えられています。また、弁舌の神ヴァーチと結合して弁舌・學問・音楽の女神(弁才天)として尊ばれましたが、大陸を横断し奈良時代、『金光明最勝王經』が日本に伝えられると、八本の手には弓・矢・刀・鉾・斧・長杵・鉄輪・羅索といった武器を握った護法神としてのお役目も担いました。

平安時代には琵琶を奏でる二臂の姿で表され、時代の変遷によってお姿も変化したのですが、室町時代以後、日本において作られた辯天五部新経により、水を司る女神として、また豊作をもたらす神として、持物もあらゆる願いを叶えるという宝珠や、福をもたらす鍵などに持ち変えたお姿で表されるようになりました。

そして最も大きな変化は、辯財天の頭上に宇賀神(顔は白髪のお老人で身体は白蛇とぐるを巻いたお姿)と、鳥居を戴いた事です。宇賀神とは宇迦之御魂尊で、農耕民族である日本人にとって、真に有難い穀物神(龍神の化身でもあります)なのです。

こうして辯財天は大陸より伝わった佛教と、日本古来の地の神が融合した神佛習合の女神として、人々の深い祈りを受けるようになったのでした。過酷な山岳地域に位置する戸隠では、なおさら大切にお祀りされた事でしょう。

さらに『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』では、宇賀神に日々仕え人々に福智を与える使者として、十五童子(それぞれに本地佛が定められています)が登場し、それぞれお役目を表す持物を手にしました。印鑰童子(右手に宝珠、左手に角形に曲がった鍵)・官帯童子(両手に帯)・筆硯童子(右手に筆、左手に硯)・金財童子(右手に秤糸、左手に秤量)・稲粉童子(右肩に稲束、左手に宝珠)・計升童子(両手に升)・飯櫃童子

子(頭上に飯櫃、腰に拳)・衣裳童子(両手に衣裳)・蚕養童子(両手に蚕器)・酒泉童子(右手に酒杓、前に酒壺、左手に宝珠)・愛敬童子(右手に矢、左手に弓)・生命童子(右手に剣、左手に宝珠)・従者童子(両手に宝珠を盛る器)・牛馬童子(牛馬を牽く)・船車童子(右手で船車を曳き、左手に宝珠)と衣食住を満たし、日々の暮らしに潤いを与える品々です。清らかな水を湛えて豊穰へと導く、辯財天の眷属らしい世界が広がりました。

賑やかで活気溢れる童子たちが彩りをそえる世界が、戸隠のお厨子の中に広がる九頭龍辯財天曼荼羅なのです。

このお厨子が十六年前の修復時まで、百三十年もの間、封印されていたのは、実は私ども佛師にとって大変悲しい事実であった、明治維新の廃佛毀釈運動が原因でした。丹精込めて謹刻された日本中の佛像の多くが破壊され燃やされるという、時代の嵐が吹き荒れたのです。辯財天曼荼羅を護る為に、このお厨子を抱え「他言無用」「開門不要」として、代々語りぬかれた方々の勇氣と篤い信仰心に、心より感謝の気持ちが湧き上がります。

浪々たる時の流れに辯財天はお姿を変え、国の政も大きく揺れ動きましたが、世に棲む人々の切々たる祈りは途絶える事なく続きます。修復させて頂きました九頭龍辯財天が、皆様の暮らしに寄り添い、御利益をもたらし、これからも苦楽を共に歩まれます事を京都大原野より念じ入ります。

合掌

まつもと みょうけい氏 プロフィール

大仏師。一九四五年京都生まれ。一九六二年京仏師・野崎宗慶師に弟子入り。一九九九年、鹿児島県最福寺に世界最大級の木造仏・大辯財天を完成。本年開創二〇〇年を迎える高野山金剛峰寺の壇上伽藍に再建された中門の多聞天、持国天の修復と、広目天、増長天の新造を終えた。

平成二十七年式年大祭

祈りをつなぐ「神と仏に出会う年」

幸せの聖地巡礼

別稿
特寄

作家 田口ラレディ

神社仏閣巡りは楽しい。若い頃から一番の趣味としている。

特定の宗教を信仰してはいないけれど、神様も仏様もとても大切に思っている。私のなかでは「神様と仏様」は二つで一つ。どちらも好きだ。お父さんとお母さんみたいなもの。二つがあって私がいる。

歩いていて神社があれば柏手を打ち、お寺があれば手を合わせる。合掌して目を閉じれば心がしんとして、「ありがたいなあ」という思いが溢れてくる。

以前にふと「いったい他の人は神様の前で何を祈っているのかしら？」と思った時があった。賽銭を投げて、二礼二拍手、合掌、さて心の中で呟く言葉は？

私はたいがい「ありがとうございます」だが、友人たちは、どうなのか。訊ねてみたら人それぞれだった。「元気で暮らせますように」「お金が儲かりますように」「恋人ができますように」……こんなに気軽にお願いができるのだから、日本の神様はお優しい。

以前に、神様が見えるという霊験のある方と神社巡りをしたことがある。その時に「田口さん、神様をお願いをするときは、正確にお願いするのですぞ。神様もお忙しいのですから、もしお金を用立ててもらうときは、必要な金額を一円まで正確に申し上げ、自分の住所氏名もはっきりと伝え、期限も決めてお願いしなさい」

「えっ、そんなに正確に？」

「あなたが人間に借金をするときはそうするでしょう。相手は神様なのですから人間以下をお願いの仕方では聞いてくださいませんよ」

な、なるほど……。それを聞いてから逆に「お金がたくさん儲かりますように」とは言

えなくなつた。ましてや「恋人」のお願いなんて軽々しくなどできない。実際、私には思い当たることがあった。小学校六年の時に初恋をした。大好きな男子がいた。彼の名は田口君だった。私は神様に毎晩お願いした。

「将来、田口君と結婚できますように」

そして十三年後に願いは叶う。しかし、この田口君かを正確に言わなかったたので、まったく想像もしなかった別の田口君と結婚してしまつたのである。これはこれで幸せなので不満はないが……。

人間を苦しみから救うことを修行とされる菩薩さまや、解脱された仏様の存在は心からありがたい。仏教の菩薩さま、仏さまは、みな元は人間だった方たちだ。他者に寄りそう慈悲の心こそ仏の本体。それは同じ人間である誰の心にもあり、人を内側から照らし導き

続けている。仏様と出会うことは裡なる光と出会うこと。さらに八百万の神様方がいらして、未熟な私を助けてくれようというのだから、こんな良き国に生まれてありがたいことこの上ない。

最近の若い人たちは「神様と仏様」の違いもよくわからないふうなのに、神社仏閣を巡るのが大好きだ。その気持ちはわかる。聖地と呼ばれる場所に行けば誰でも感じるあの清々しさ、神々しさ。掃き清められた穢れなき空間に立ち入れば、自分の身体にまわりついた煤も払われる心地がする。まさに、魂のシャワー。豊かな時代に育った子どもたちは、他人と食べ物を争うこともない。物を奪い合うこともない。優しい心根の若者が増えた。魂が清からなので、神聖な雰囲気にも敏感なのだろう。

新緑の奥社から戸隠山を望む



今回、この原稿を書くにあたって久しぶりに戸隠神社奥社を参拝した。幽玄な大杉の並木を歩いていると、杉の幹が淡く黄金に光っている。凜として清らかな空気なのか、小雨の音すら胡琴のようだ。歩いていると思わず笑みがこぼれる。楽しいなあ、とお山を見ると、お山も笑っている。

「ほら、お山が笑っているよ」と言う、そんなのは気のせいだとちやかす人がいる。山は笑わない、と。

およそ人間が体験することの多くは気のせいだ。気のせいでいいのだ。風にそよぐ花も、さらさらと流れる小川の水も、私にはみんな笑いさざめいているように感じられる。それが幸せというものじゃないか。

かつて修験者は山に入って自然と感応し、山に満ちる靈気を身体に取り込みそのエネルギーで病氣治療や奇跡を起した。動物とは違い、言葉をもっている人間だけが、

意識という微細なエネルギーを使い天変地異や疫病を鎮めてきた。自然のエネルギーである神様と、意識を研ぎ澄ました仏様が力を合せ、国土を護ってきたのだ。

神様と仏様、そのおおもとはまばゆい光。森羅万象のすべてに、この光のかけらが宿っている。聖なる土地に赴くと、小さな光のかけらがきらきらと輝くのがわかる。その輝きこそ、微笑み。人が微笑むとき、光のかけらがさざめいている。赤ちゃんと無邪気に笑うとき、それはとてもよくわかる。仏の微笑み、神社の御幣がゆさゆさと風に振れる様子にも、光のかけらが見える。道すがら出会う人の優しさ、朽ちたお地蔵さまの丸みにも、光のかけらが見える。なんという至福。

幸せを感じるから、人は神様仏様に会いに行くんだ。神様も仏様も、ただひたすら人の幸せを願ってくれている。ほんとうにありがたい。

たぐち らん でい氏
プロフィール

1959年生まれ。作家として「サンカーラ」(新潮社)「あの世の準備は出来ていますか」(マガジンハウス)「ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ 原子力を受け入れた日本」(ちくま書房)「ゾーンにて」(文藝春秋社)など。

青龍殿
宝物館

式年大祭特別企画展 開催中

◆江戸の商人と戸隠信仰

◆戸隠山顕光寺御開帳の記録

入館料 300円
小学生以下 200円
ほか